

田平町文化財調査報告書第6集

中野ノ辻遺跡

1992

長崎県田平町教育委員会

田平町文化財調査報告書第6集

中野ノ辻遺跡

1992

長崎県田平町教育委員会



発刊にあたって

中野の辻遺跡の第2次調査（昭和56年）当時に石棺の存在が確認されていましたが、その調査が約10年間中断されていました。

このたび地主からの要請もあり、平成3年9月24日から11月9日までの間、長崎県教育庁文化課文化財保護主事町田利幸先生のご尽力により第3次の調査を実施することができました。

石棺11基の他ガラス製の管玉3点と石製の管玉6点、鉄片2点、土器片6点が石棺の中から出土しました。

この遺跡は、弥生時代後期から古墳時代の箱式石棺群であります。

この遺跡の重要性を多くの人に認識していただくためにも、今後の発掘調査を契機に現地にこれを復元して一般の観覧に供するような保存の計画を進めます。

最後に、今回の調査の実施にあたっては、県文化課の格別なるご配慮と文化財保護主事町田利幸先生のご指導に深く感謝を申し上げますとともに発掘作業にご協力いただいた地元の方々並びに地主の岡田さんに厚くお礼申し上げます。調査報告書発刊のことばといたします。

平成4年3月31日

田平町教育長 松田正幸

例 言

- 1 本書は、長崎県北松浦郡田平町萩田免中野ノ辻に所在する中野ノ辻遺跡緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成3年9月24日～11月9日に実施した。
- 3 調査は、田平町教育委員会より依頼を受け、長崎県教育庁文化課が実施した。
- 4 調査関係者は、以下のとおりである。

田平町教育委員会

教育長 松 田 正 幸

主 事 安 河 内 毅

地 主 岡 田 俊 明

調査員

出 川 アキ子・福 井 節 子・前 田 キ

ヌ子・尾 崎 モ ト・西 村 ヌ イ

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事 町 田 利 幸

- 5 遺構実測にあたっては、馬場聖美（吉井町立北小学校）・安河内に11・19・21号の協力を得た。また、図版作成にあたっては、渡辺洋子・森洋子・黒川弘子・斉藤いづみ・本出秀樹の協力を得た。
- 6 調査・遺物に関する撮影は、町田が行った。
- 7 本書の編集・執筆は町田が担当した。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査	6
(1) 調査概要	6
(2) 遺構	8
11号石棺	8
12号石棺	8
13号石棺	11
14号石棺	12
15号石棺	12
16号石棺	13
17号石棺	17
18号石棺	17
19号石棺	20
20号石棺	20
21号石棺	23
(3) 遺物	25
1 管玉	25
2 土器	26
3 鉄器	26
4 その他	26
IV まとめ	28
(1) 石棺について	28
(2) 石棺の時期について	29

挿 図 目 次

第1図	田平町地形分類図	2
第2図	田平町遺跡分布図	4
第3図	中野ノ辻遺跡調査位置図	6
第4図	遺構配置図(1/400)	7
第5図	11号石棺実測図(1/20)	9
第6図	12号石棺実測図(1/20)	10
第7図	13号石棺実測図(1/20)	11
第8図	14号石棺実測図(1/20)	13
第9図	15号石棺実測図(1/20)	14
第10図	16号石棺実測図(1/20)	15~16
第11図	17号石棺実測図(1/20)	18
第12図	18号石棺実測図(1/20)	19
第13図	19号石棺実測図(1/20)	21
第14図	20号石棺実測図(1/20)	22
第15図	21号石棺実測図(1/20)	24
第16図	石棺内出土遺物	26
第17図	その他の遺物	27
第18図	中野ノ辻石棺法量と主軸方位(1~10号)	28
第19図	中野ノ辻石棺法量と主軸方位(11~21号)	28
第20図	宮ノ本遺跡石棺図①(1/40)	30
第21図	中道壇遺跡石棺図②(1/40)	31
第22図	白井川・中野ノ辻遺跡石棺図③(1/40)	32
第23図	中野ノ辻遺跡石棺図④(1/40)	33

表 目 次

第1表	田平町遺跡一覧表	5
第2表	中野ノ辻遺跡石棺計測表	27

図版目次

図版1	遺構配置（北側より撮影）	39
図版2	11号石棺	40
図版3	12号石棺	41
図版4	13号石棺	42
図版5	14号石棺	43
図版6	15号石棺	44
図版7	15号石棺・出土遺物	45
図版8	16号石棺	46
図版9	16号石棺・調査風景	47
図版10	17号石棺	48
図版11	18号石棺	49
図版12	19号石棺	50
図版13	19号石棺・実測風景	51
図版14	20号石棺	52
図版15	21号石棺	53
図版16	土壌（南側より撮影）	54
図版17	石棺内出土遺物・その他	55

I 調査に至る経緯

調査の端緒は、昭和55年11月18日に耕作者の前田平一氏が、石棺を発見し町教育委員会へ連絡があったことに始まる。

同年11月21日現地にて県文化課、町教育委員会、耕作者とで協議があり耕作の支障になる石棺3基についてとりあえず発掘調査となる。これが第一次調査である。

第二次調査は、翌56年5月に国庫補助をうけて実施し、石棺7基の発掘とさらに南側畑地の岡田力太郎氏所有から石棺4基を検出し計14基をこの調査で確認している。検出した4基については、現在のところ耕作の支障にならないという配慮から現地保存することで理解を得ていた。

しかし、平成3年地主の岡口氏より耕作地の整備を行いたい旨町教育委員会へ連絡があり、協議の結果発掘調査となった。発掘調査は、田平町教育委員会を主体とすることとし、長崎県教育委員会文化課が調査の担当にあたった。調査年は、平成3年9月24日～11月9日の間に実施した。



II 遺跡の立地と環境

遺跡の位置は、萩田の集落に近年、松浦鉄道西田平駅が開設されており、これより約500mほど南西方向に行った標高約60mの丘陵部にある。

田平町は、長崎県北部の北松浦半島2市7町の中にある。西に平戸瀬戸を挟んで平戸市があり、平戸大橋が開通（1977年）する以前は田平港から平戸へ船による人の往来で港周辺は賑いをなしていた。町の東は、松浦党発祥の地松浦市と接し、南側は、江迎町と接している。

町内は、溶岩台地^{註1}でほぼ覆われているが、幾つかの小河川がこの台地を開析し入り込んだ谷底平野を形成している。その代表的な地形が、南から北へ下る釜田川の中流域で台地を開析して萩田平野を形成し、下流では里山原平野を形成しており二大水田地帯を作り出している。

県文化課が昭和59年に実施した周知事業による遺跡分布調査では、現在47遺跡があがっている。この内測量調査及び発掘調査を行っている遺跡が7遺跡ある。旧石器時代では、日ノ岳遺跡がある。Ⅲ・Ⅱ層にナイフ形石器を主体とした文化層があり、これに共伴してⅢ層から台形及び台形様石器が出土しているが、Ⅱ層からは、台形・台形様石器の出土が無くこの石器の消滅を考えるうえでの重要な位置にある。縄文時代では、早期末～中



第1図 田平町地形分類図

※註1より転載

期にかけてのつぐめのはな遺跡^{註3}がある。遺物の主体は、甕式B土器と阿高式土器があり共伴石器に漁撈具と考えられる石鈿が出土している。また、つぐめのはな遺跡から約400m離れた前日遺跡^{註4}の調査でも同様な遺物が出土している。次に、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけて多量の木製品を出土する里田原遺跡^{註5}が知られている。過去に、調査を26回数え遺構にはドングリ貯蔵穴・護岸施設等を検出している。出土品は、広鎌・堅杵等の農耕具があり、農耕の成立と定着を示唆している。また、ちょうな・よき等の柄の木製品は、社会の分業化を意味し、磨製石剣・杵・槽等の出土は祭政に関わる貴重な資料といえる。古墳時代では、笠松天神社古墳^{註6}は前方後円墳の全長34m後円部の直径22m、高さ2.5mあり墳丘斜面に葦石がある。埋葬施設に竪穴式石室か石棺があった可能性が、考えられている。また、平成3年に同じく前方後円墳の岳崎古墳^{註7}の測量調査を実施し、全長56m、後円部の直径33mで高さが6.5mを測る。古代から中世には里田原に残る条里遺構があるが調査については行われていない。

註1 『土地分類基本調査』「平戸」5万分の1県北総合開発地域国土調査長
 崎県1974

註2 下川逸彌・久村貞男「白ノ岳遺跡」『日本の旧石器文化』3遺跡と遺物
 〈下〉雄山閣出版株式会社1984

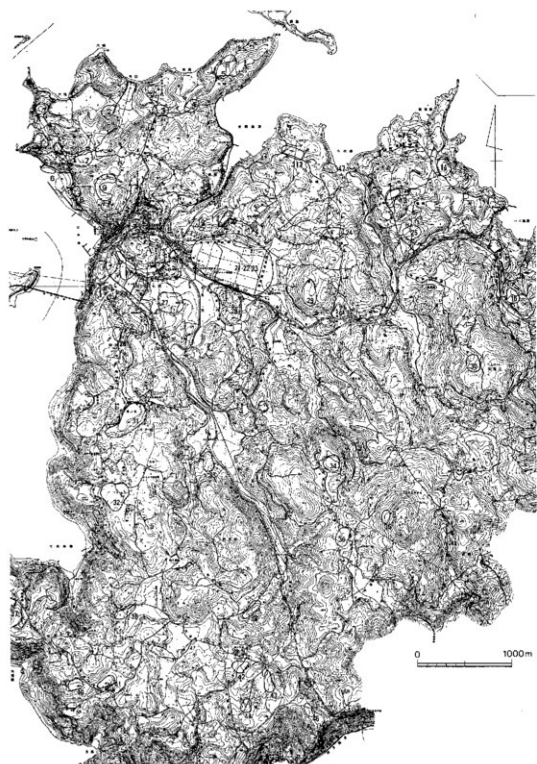
註3 正林護・村川逸朗編「長崎県埋蔵文化財調査集報IX」『つぐめのはな遺跡』——北松浦郡田平町所在——長崎県文化財調査報告書第82集長崎県教育委員会1986

註4 高野晋司編「前日遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報X』長崎県文化財調査報告書第86集長崎県教育委員会1987

註5 正林護・林川逸朗「里田原」田平町文化財調査報告書第3集長崎県田平町教育委員会1988

註6 藤田和裕編「笠松天神社古墳」田平町文化財調査報告書第4集長崎県田平町教育委員会1989

註7 副島和明著「長崎古墳」『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県文化財調査報告書第106集長崎県教育委員会1992



第2圖 田平町遺跡分布圖

第1表 田平町遺跡一覧表

番号	名称	種別	時代	所在地
1	ハエ崎遺跡	包蔵地	縄文	野田免字ハエ崎
2	日ノ岳遺跡	縄文	先土器	大久保免字大池
3	中瀬遺跡	散布地	//	// 字ヤブ田・中瀬
4	永久保遺跡	//	縄文	// 字永久保
5	大崎みやま遺跡	//	先・縄文	// 字田ノ頭・みやま
6	つぐめのはな遺跡	包蔵地	縄文	野田免字ハエ崎 (通称つぐめのはな)
7	野田遺跡	散布地	先・縄文	// 字上野田
8	前目遺跡	//	縄文	山内免字前目
9	猿新田遺跡	//	先・縄文	// 字猿新田
10	陣笠城跡	城跡	中世	日の浦免字城山
11	岳崎古墳	前方後円墳	古墳	岳崎免字複網代
12	岳崎遺跡	散布地	縄文	// 字岳崎
13	茅場池周辺遺跡	//	//	福崎免字茅場
14	福崎B遺跡	//	//	// 字佐賀里
15	小崎遺跡	//	//	小崎免字辻畑
16	小崎B遺跡	//	//	// 字松本
17	永田遺跡	//	//	山内免字馬場崎・小手田免字永田
18	龍手田城跡	城跡	中世	// 字片宗・城山
19	里城跡石塔群	墓	中世	里免字中畑
20	里城跡	城跡	//	// 字城
21	里田原遺跡	包蔵地	縄・弥・古	// (通称里田原)
22	里田原条里遺跡	条	奈良	// (//)
23	里田原支店墓	石墓	・弥・縄	// (//)
24	久吹遺跡	散布地	先土器	// 大津万久吹
25	福崎A遺跡	//	縄文	福崎免字北野畑
26	坊田遺跡	//	先土器	小手田免字坊田
27	小手田遺跡	//	縄文	// 字椿崎・髭澤
28	笠松神社古墳	前方後円墳	古墳	小手田免字米ノ内(笠松神社境内)
29	上里遺跡	散布地	先・縄文	里免字上里
30	中里遺跡	//	縄文	小崎免字中谷
31	嶋山池遺跡	//	縄・弥	小手田免字嶋山池(しぎやまいけ)
32	五島ヶ原遺跡	//	先・縄文	下寺免字五島ヶ原
33	中野ノ辻遺跡	墓址	弥・縄	萩田免字中野ノ辻
34	田代A遺跡	散布地	先土器	田代免字嶋山
35	吹上石垣田遺跡	//	縄文	// 字石垣田
36	田代B遺跡	//	先土器	// 字小高峰・久免
37	外目遺跡	//	縄文	下寺免字外目・堤床・ダイヤ
38	下寺遺跡	//	//	// 字中村・越首
39	萩田遺跡	//	先・縄文	萩田免字横立
40	以善遺跡	//	先土器	以善免字大塔
41	石垣田遺跡	//	//	// 字石垣田
42	南小学校前遺跡	//	先・縄文	深月免字北河内
43	馬の元遺跡	//	//	// 字丸山
44	万場遺跡	//	//	// 字中田・大畑・中ノ辻
45	深月遺跡	//	縄文	// 字コイ首・針木辻
46	以善ヶ浦遺跡	//	//	以善免字宮ノ谷
47	久吹浜遺跡	包蔵地	縄・古	岳崎免字久吹浜

Ⅲ 調 査

(1) 調査概要

調査に先立ち、石棺の基数確認から実施することとし、重機により表土の除去作業から行った。昭和56年の調査で4基を確認していたことで、実測等の調査日程を2週間ほどと計画していたが、560㎡の畑地の表土を除去すると新たに7基の石棺が出土し、合計11基の実測調査を行うこととなり、調査日程を大幅に変更せざるをえなくなった。

石棺の記号番号については、昭和56年度の報告で1～14号^{註1}が付してあるため、そのままこれを踏襲し以下15～21号と付した。

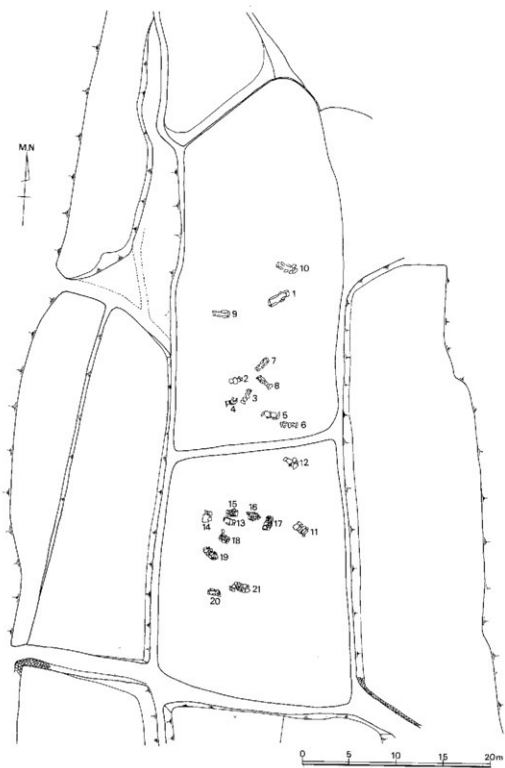
遺構の配置は、調査区中央に13～19号の7基が集中し、やや東側に11号が南側に20と21号がある。12号は前回調査の北側に離れて位置する。

石棺の構造は、地山を掘り込んで土填とし、石棺には6～14枚程度の玄武岩質の石材を長方形に組合わせこの上に蓋石を2段～4段積重ねていた。

遺物には、ガラス製の管玉3点と碧玉製の管玉6点、管玉状製品1点、刀子1点、土器片6点が石棺内から出土した。なお、取りあげた11基の石棺材については、それぞれ記号番号付し、移築復元が可能な状態で町教育委員会にて保管している。



第3図 中野ノ辻遺跡調査位置図(1/5,000)



第4图 遗址配置图 (1/400)

(2) 遺 構

11号石棺

(第5図, 図版2)

昭和56の調査時に、蓋石までの確認と写真撮影を行っていたものである。

土壌は、隅丸の長方形を床面呈し、長軸で136cm、短軸東側で38cm西側で35cmを測る。西側短辺が、中央部床面より5cm掘り下げているが、西小口壁に長さ57cmの板石を設置するため掘り下げたと思われる。

棺身は、内法で長さ127cm、東側小口幅が29cm、西側小口で20cmある。長方形の棺材の幅が30cm前後のもの、50~60cm程度の石材を交互に端部を組合わせ北側長側壁で4枚を南側で3枚使用している。また、棺身の上部の凹凸を水平に保つために北側に3枚、南側に4枚配置している。小口石は、西側に縦55cm、厚さ5cmの薄手の石材を用い、東側には縦42cm厚さ9cmほどの厚みのある石材を使用している。両長側壁と小口の端部が合致するように構成している。主軸方位N131°45'Eを示す。

蓋石は、ほぼ石棺全体を覆い隠す状態で中央部からそれぞれ東西に3枚づつ厚さ10cm前後長さ60~70cmの長方形の玄武岩を10枚並べ持ち送りに積み重ねている。

出土遺物には、ガラス製管玉3点と碧玉製管玉6点が出土している。

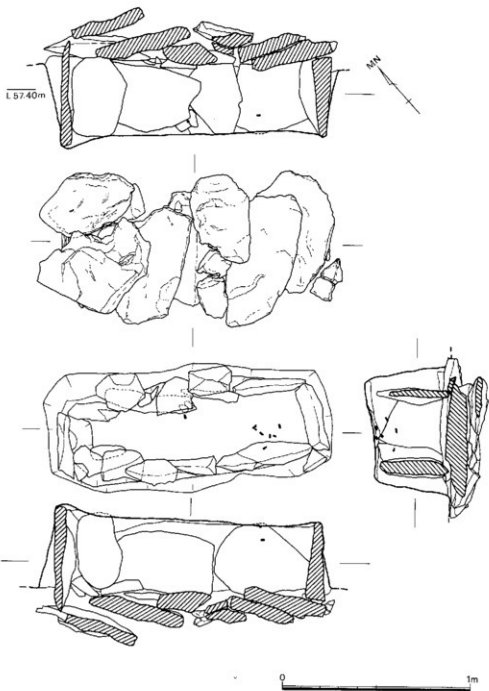
12号石棺

(第6図, 図版3)

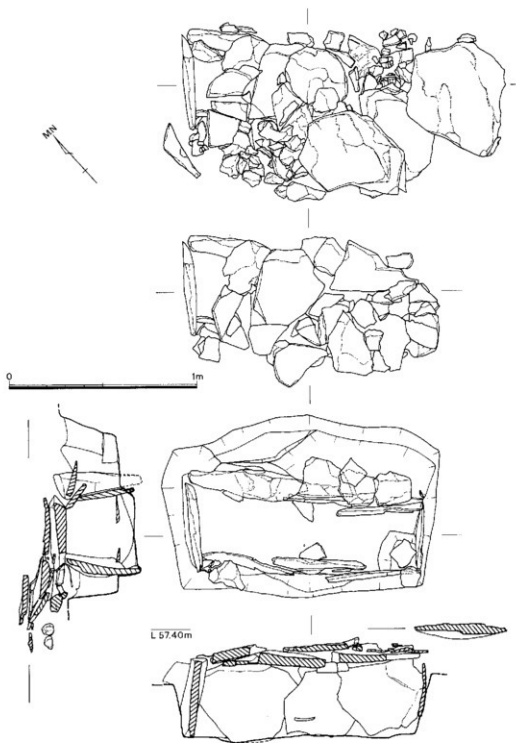
土壌の掘り下げは、地山面から東側で32cm、西側で28cmある。長さが133.5cm東側の幅で35cm、西側幅が48cmを測る。土壌内に張りだし部が2か所あり1つは、北側に長さ約82cm幅が約25cm床面よりの高さ約10cm程度で上面はほぼ平坦となっている。もう1か所は南東隅に南北18cm東西13cm、床面より約9cmのフラットな面が設置してある。北側平坦な張りだしは、棺身の外側にあたり、南東隅の張りだしは棺身内にある。

棺身は、北長側壁に45cm×50cmほどの石材を3枚、厚みのあるものから順次西側より継ぎ足している。南長側壁も同様3枚の石材をあてがっているが、中央部の石材が2枚の側石を押え込むように設置している。また、設置した棺身のレベルを一定の高さに保つために、棺外の北長側に5枚、南長側に8枚の大きさが15~20cmの礎を乗せている。棺身の内法で114cmあり東小口32cm、西小口36cmを測る。主軸方位は、N131°Eを指す。

蓋石の構造は、2段重ねになっており、上部に比較厚みのある不定形の玄武岩を置き下部は、棺身を覆い隠すように20~30cm程度の礎をモザイ



第5图 11号石棺实测图 (1/20)



第6图 12号石棺实测图(1/20)

ク状に並べている。

遺物には、土器片3点が出土するが、小片のため器形、時期等は不明である。

なお、この石棺は、蓋石の長軸と棺身の長軸線が一致しないため新たに実測の造り方を組替え図化している。

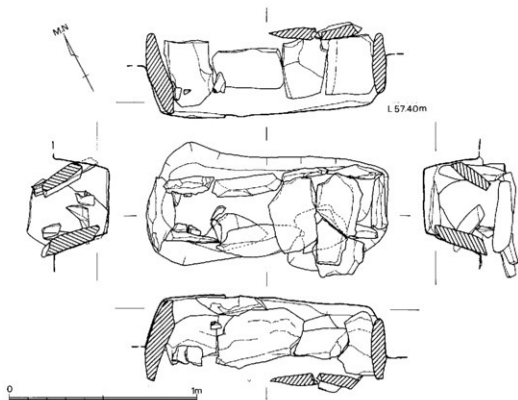
13号石棺

(第7図、図版4)

検出した位置は、15号と18号に挟まれた部分にあった。

土壌の形状は、東側がやや細く西側が広がる隅丸の長方形を呈している。長軸114cm、深さは、東側で27cm、西側で24.5cm、現地山面より掘り下げており、床面が東側から西側へ傾斜ぎみに土壌を形成している。

棺身には、北長側壁に4枚と南長側壁に4枚をそれぞれ30×40cm程度の



第7図 13号石棺実測図(1/20)

やや厚みをもつ礫を配置している。長軸の長さは105cm, 小口東側で25cm, 西側で18cmを測る。主軸方位はN117°Eを示す。

蓋石は、耕作時に抜き取られたものか、4枚が東側に認められるのみの状況であった。

出土遺物は、石棺内の土をフルイにかけて調査したが、出土品は無かった。

14号石棺

(第8図、図版5)

南北に、主軸方位をとり土壌床面は、隅丸の長方形を呈している。床面からの立ち上がり、緩やかに上部へ移行する。また、床面中央から南側に2cm程度の浅い段差がついている。長軸の長さ108.5cm, 北側幅が32cm, 南側で48cm, 地山上面から床面までの深さ北側で38cm, 南側で37cmを測る。

棺身の設置状況は、東長側壁に2枚、西長側壁に4枚それぞれ薄い板状の玄武岩を組合わせている。内法で棺身長が106cm小口北側で34cm南側で34cmを測る。小口壁の東西両板石は土圧のため、中央部より折れ内側へ突き出た状況をなしている。主軸方位は、N14°50'Eを示す。

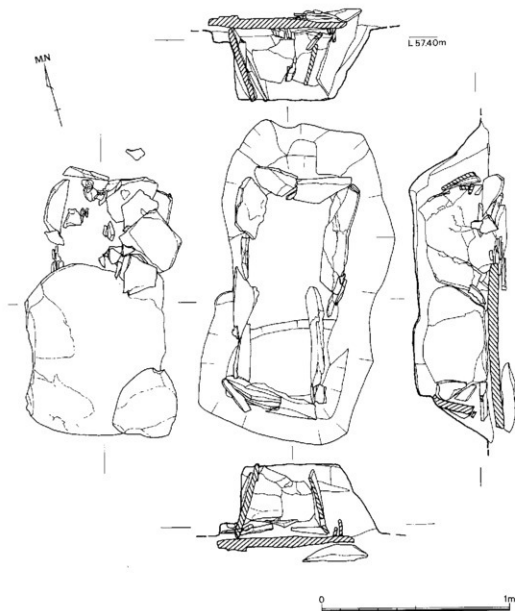
蓋石は、扁平な長楕円形の玄武岩が1枚残る。長さ約90cm, 幅が約70cmを測る。この他に、北側部が空白になっているが、小礫の散乱状況から本来は棺身を覆う石材が乗っていたものと思われるが、耕作時に抜き取られたものであろう。

15号石棺

(第9図、図版6・7) 土壌のプランは、長楕円形を呈し床面長軸で82cm, 東側幅が31.5cm, 西側で幅29cmを測る。深さは、東側で49cm, 西側で41.5cmを測る。西側のピットを切り込んで土壌を形成している。

棺身の埋設構造は、北長側壁に東から順次2枚あてがい、南長側壁には70×35cmの板石1枚とこの外側に40×20cmの長方形の板石を押しあてがつている。小口の板石は、長側壁の端部外側に東側で30×40cm, 西側で37×32cmの板石をそれぞれ設置している。主軸方位は、N78°25'Eを示している。内法で長軸の長さが64cm, 東小口壁24cm, 西小口壁28cmを測る。

石蓋の状況は、19枚の板石を4段に積み重ね棺身を嚴重に覆い尽くしている。

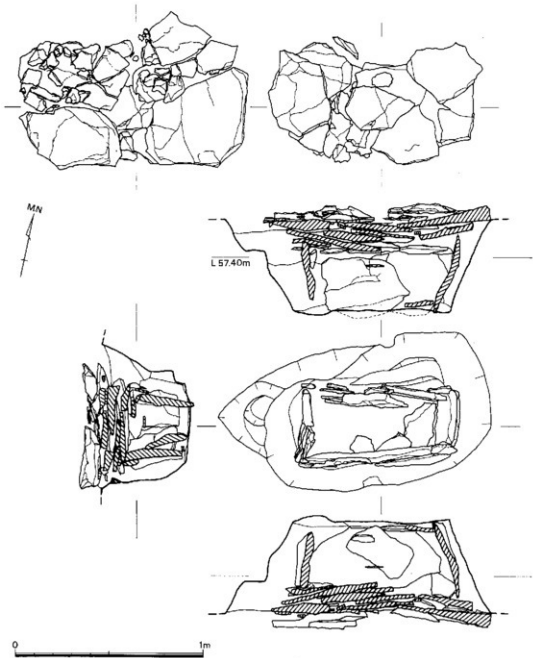


第8図14号石棺実測図

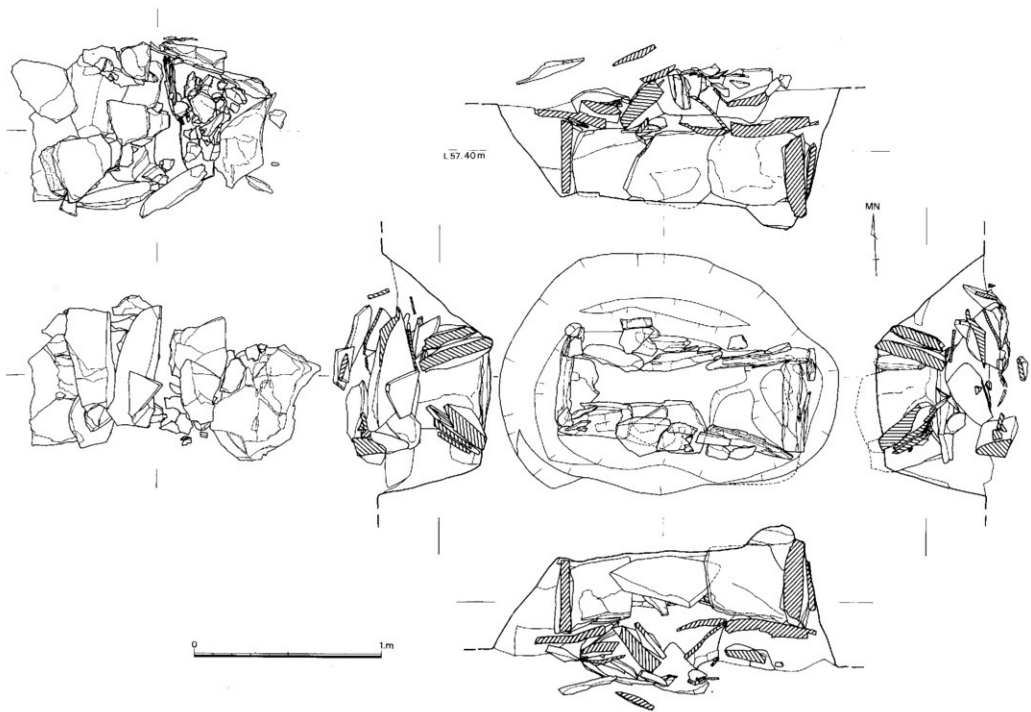
16号石棺

(第10図、図版8・9) 蓋石を検出した際に上部板石が複雑に重なりあっており、棺身が長軸線と一致しないことも考慮にいれながら実測に入った。

土壌は、上面がタマゴ形を呈し、床面は隅丸の長方形をなしている。床面は、西から緩く東側へ傾斜し東側隅を小口石が入るように掘り下げてい



第9图 15号石棺实例图 (1/20)



第16号石棺实例图

る。西側小口付近には、地山の礫が顔を出しており、これ以上は掘り下げが出来なかったと思われる。長さが139cm、東側幅が57cm、西側で56cmを測る。

棺身は、長軸の長さ114cmで小口東側47cm、西側が25cmある。比較的平均した大きさの板石を北側と南側の長側壁にそれぞれ3枚づつにあてている。長側壁は、東側の小口を採み込んだ状態をなし、西側小口は、長側壁端部と接するような構造を成していたと思われるが、中央部から土圧による歪で離れた状態になっている。主軸方位N93°Eを示す。

蓋石は、下部は丁寧に板石を覆っているが、上部にいくにしたがって著しく乱れている。棺身から上部蓋石の重なるの厚さは、約45cmある。

17号石棺

(第11図、図版10)

土壌プランは、長軸を南北にとり、床面は隅丸の長方形を呈して。長さ109cm、北側幅53cm、南側で50cmとやや幅のある土壌である。深さが北側で55cm、南側で46cmを測る。中央部より北側がやや掘り下げた状態である。

また、南側隅には小口の板石をはめ込むために凹めた部分が見受けられる。

棺身は、両小口石が外側にあり、東西の長側壁にはそれぞれ2枚のやや厚みのある板石を設置している。長軸の長さが、102cmの北側小口45cm、南側小口47cmを測る。主軸方位N21°30'Eである。東長側板石の大きいほうで横約60cm、縦50cm、小さいほうで、横が約45cm、縦が約35cm西長側板石が横約60cm、縦40cm、と横が約55cmに縦が約35cmを測る。

蓋石の構造は、2重になっており、下部の蓋石にやや小さめの板石を乗せ、ほぼ棺身を覆いその上から、さらに大きな長方形の玄武岩礫を積み重ねている。

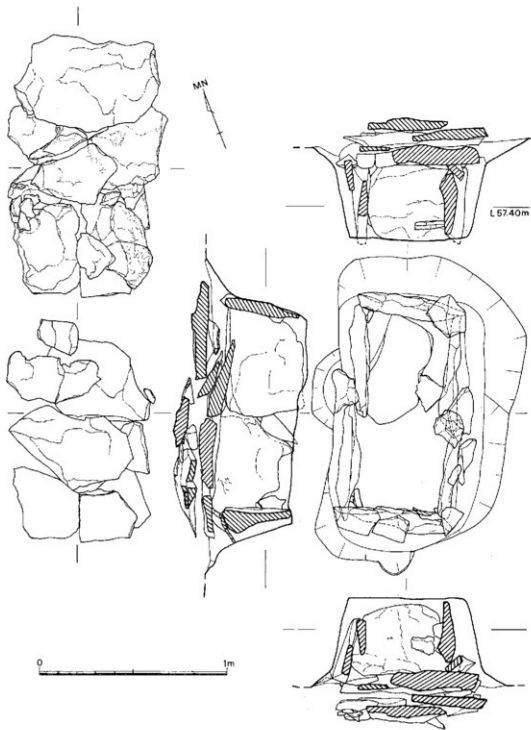
遺物の出土は、管玉状の製品1点があった。

18号石棺

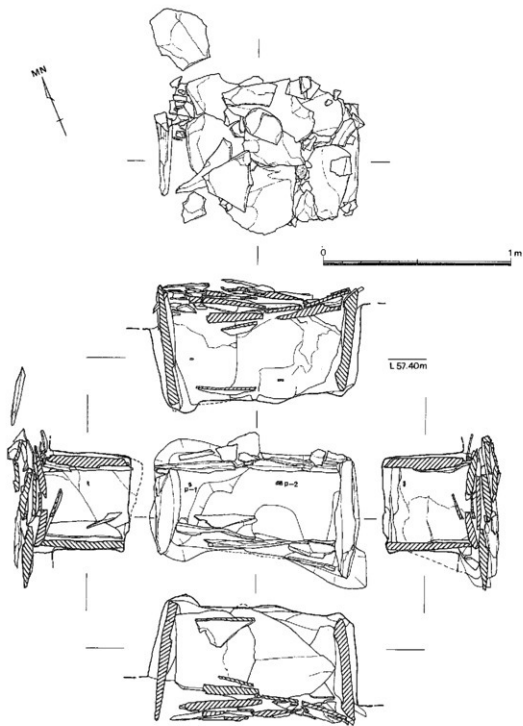
(第12図、図版11)

土壌は、隅丸の長方形を呈し主軸を東西方向にとり、東側と西側に浅い掘り込みがある。長さは、95cmに東側幅が58cm、西側幅で49cmある。地山面より深さが東側で43cm、西側で41.5cmとなる。床面の中央部より南側に浅い高まりが残る。

棺身の構造は比較的こじんまりとまとまり、小口の板石が両長側壁より10cm程度高くなるように配置し、南北の長側壁は長方形の板石を横に置い



第11图 17号石棺实测图 (1/20)



第12图 18号石棺实测图 (1/20)

てほぼ両上端を水平になるよう形成している。北側には板石2枚、南側には板石を3枚使用している。長軸の長さ内法で84cm、東側小口に36cm、西側小口33cmを測る。主軸方位N112°Eを指す。なお、床面上に1枚立て掛けのように板石があるが、これは下部蓋石が落下したものと思われる。

蓋石は、小形の石棺のわりには4段にモザイク状に厚さ3cm程度の板石を23枚も積み重ねて嚴重に棺身を覆い尽くしている。

出土遺物には、土器片2点があった。

19号石棺

(第13図、図版12・13) 土壌は、西側がやや広く東側がせばまった隅丸の長方形をなす。東側が広がっていることは、小口石のサイズに合わせてはめ込むために意識的に掘り広げている状況である。長さは、132cm、東側幅35cm、西側幅47cmを測る。

棺身は、長側壁に4枚づつ設置している。板石の大きさは、縦が40cm前後のものを重ねあわせ並べている。小口の板石は、長側板石端部のおさえに縦45cm程度のものを用いその外側を15cm～20cm程度の板石が西側で3枚、東側で3枚をそれぞれ補強にあてている。石棺材は、いずれも華奢な玄武岩の板石を用いている。棺身は、内法で長さ120cm、東側小口19cm、西側小口33cmある。また、深さが東側で44cm、西側で40cmを測る。主軸方位は、N120°Eである。

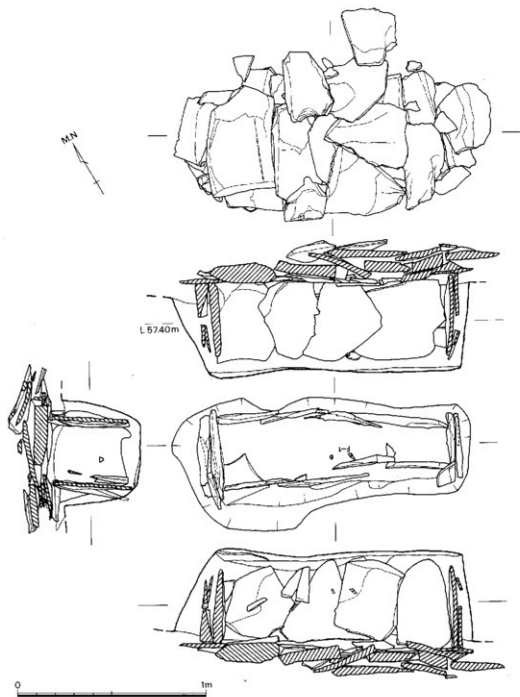
蓋石の構造は、棺身のレベルを一定に保つため、下部に長方形の厚みが1cm内外、長さ25～30cm、幅10～20cm程度の板石を20枚棺身の石材のみを覆う状態で乗せている。この上に蓋石を2段に分け5～10cmほどの厚みを持った板石を積み重ねている。

遺物には、棺身中央部やや南東側の床面より20cmほど上に刀子と土器片が出した。

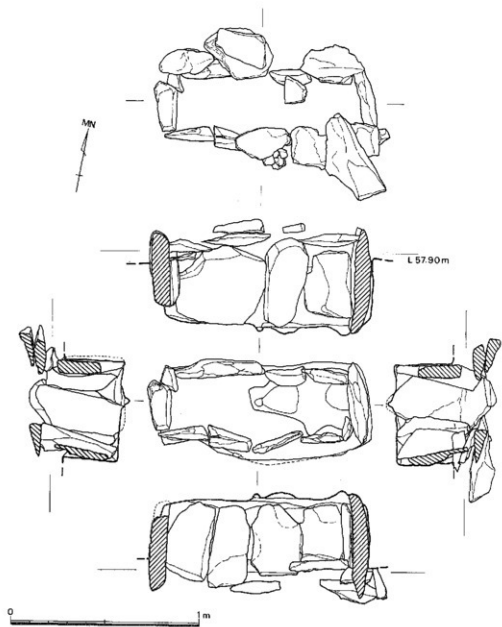
20号石棺

(第14図、図版14) 土壌は、南側がやや開きぎみに掘り込まれ、中央部から東側がやや深くなっている。長さは107cmで東側の幅が35cm、西側で31cm、深さが東側で34cm、西側で28cmを測る。隅丸の長方形を呈している。

棺身は、11枚の板石で構成し、北長側壁に3枚と南長側壁に4枚使用している。小口と長側壁の北側隅と南側隅に隙間が生じたためか、幅10cm前後で40cmと30cmの柱状の板石を小口石としてあてがっている。南側長側壁



第13图 19号石棺奥测图 (1/20)



第14图 20号石棺实测图 (1/20)

は土丘のためか中央部でやや乱れが生じている。内法での長さは、95cm、東側小口28cm、西側小口で27cm。主軸方位N80°10'Eを示す。石棺材は、いずれもまるみを持ったやや厚手の玄武岩を用いている。

出土遺物は、なかった。

21号石棺

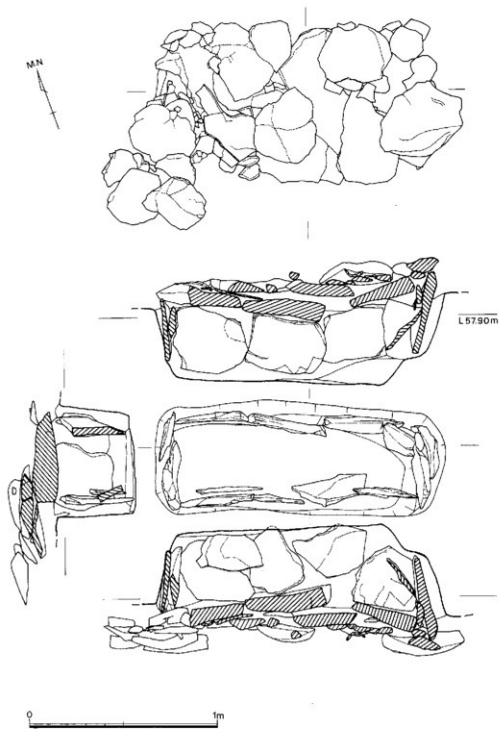
(第16図、図版15)

土墳は、長さ120cmで東西に長軸を持つ。東側で床面より15cm程度いったん立ち上がり、さらに10cmほどの平坦面をなして立ち上がる。小口の板石を設置するための施設と考えられる。プランは、隅丸の長方形をなしている。東側幅が23cm、西側幅が38cmを測り、深さは、東側で49cm、西側で36.5cmを測る。

棺身の構造は、北長側壁に4枚と南長側壁に5枚の板石を並べている。小口には、東西に2枚の板石を使用し、東側小口板石は縦40cm、西側小口板石で縦30cm前後となっている。また、北長側壁と小口との間に5cm程度の隙間が生じたため三角形の板石を1枚あて、小口への補強ともなっている。また、南側の長側壁の内側に30×20cm程度の板石を置いているが、これは西側長側壁2枚の板石下部が開いているために設置したものと思われる。内法で123cm、東側小口35cm、西側で42cmを測り、主軸方位N109°Eを指す。

蓋石は、2重構造になっており、下部は比較的均整のとれた角礫材を棺身を覆うように乗せ、その上に30cm前後の門礫を乗せている。

註1. 高野晋司編『中野ノ辻遺跡・星田原遺跡』田平町文化財調査報告書第1集田平町教育委員会1982



第15图 21号石棺墓测图 (1/20)

(3) 遺物

昭和55～56年の10基の石棺調査では、4号から土器片、5号ではガラス製小玉344点・ヒスイ製玉1点、6号よりガラス製小玉の108点、7号から刀子1点、8号より土器片、9号より管玉1点・ガラス製小玉3点、10号より土器片が出土していた。

今回の調査では、5基の石棺内より、ガラス製管玉3点、碧玉製管玉6点、土器片6点と黒曜石割片1点、刀子1点の出土があった。

時期については、土器が小片のため時代を判定するには不安がある。ただし、ガラス製の管玉については、沓岐島の「原の辻遺跡」カメ棺内より類似の出土があり、11号石棺については、弥生時代後期であろうと考えられる。なお、19号石棺より出土の鉄製刀子は、取り上げ時には折れ重なっていたため器種についてはよく分からなかったが、持ち帰り接合を行った結果刀子とわかった。

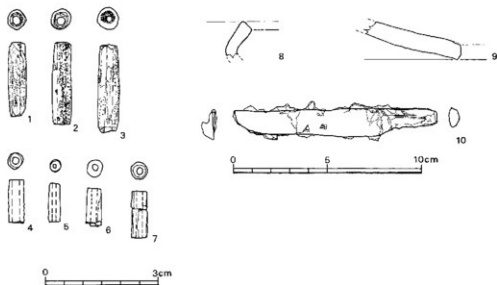
1 管玉

(第16図 図版17)

11号石棺内から9点の出土があった。1～3は、ガラス製で全体に質が悪く、気泡で覆われた状態である。形状は、いずれも中央部が膨らみ両端が細くなる。4～7は、碧玉製で両端が鋭利な道具で切り落とした状況である。長さ、径ともに不揃である。色調は、淡い青緑色を呈し、風化が進行し、脆くなっている。4点の他に2点調査中に出土していたが清掃中に自然崩壊して図化していない。

1は、現存長で、1.94cm、最大径0.49cm、内径0.2cm全体に気泡が入り質が良くない。色調は、淡いライトグリーンである。2は、長さ2.17cm、最大径が0.48cm、内径0.23cmやはり気泡が混じる。色調も1と同様となっている。3は、長さ2.28cm、最大径が0.54cm、内径が0.18cmで質・色調とも1と同様である。4は、長さ1.17cm、最大径0.4cm、内径0.19cmで両端部が平坦である。5は、長さ1.02cm、最大径が、0.31cmと4よりやや細みとなり内径0.11cm。6は、長さ1.04cm、下端部を欠失している。最大径が0.43cm、内径0.16cm。7は、長さ1.23cm、最大径が0.42cm、内径で0.19cmを測る。

この他、17号石棺より、薄い膜状様にねじれ重なった管玉状の遺物がある。現存で長さが2.4cm、幅が0.97cm、内径0.3cm。全体に風化し、触れるだけで崩壊してしまう。色調は黄白色に部分的に青味がかかった箇所が認められる。



第16図 石棺内出土遺物

2 土器

(第16図, 図版17) 12号・18号・19号の石棺内より計6点出土しているが、図化したのは、18号石棺の2点で、他は、胴部の小片のため記載していない。

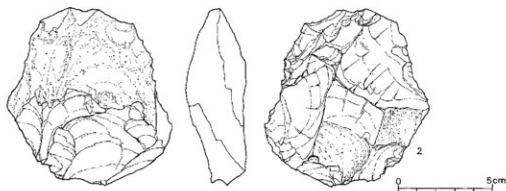
8は、小形の壺類の口縁部であろう。頸部から反転して、口縁部が外反する。口縁端部は、平坦をなす。胎土に石英粒・長石を含み焼成が甘い。色調は赤褐色を呈し、ナデ整形と思われる。9は、比較的肉厚の土器で、高杯の脚裾部と思われる。胎土に石英・長石粒が混じる。色調は、赤褐色を呈している。

3 鉄器

(第16図, 図版17) 19号石棺の中央部の南長側壁付近より出土している。現存長10.7cm, 刃部の長さが7.9cm, 幅1.2~1.4cm, 背の厚み0.15cm, 長方形の茎には木柄が付着している。茎の長さが2.8cmを測る。

4 その他の遺物

(第17図, 図版17) 調査区の表土から、石鏃が1点と調査区以外の畑地からサヌカイト製のスクレイパーを表面採集している。1は、黒曜石製で、正面側縁より細かい調整を全周に施す。脚部は右側を欠失する。裏面は、正面ほどの調整はおこなっていない。断面凸レンズ状をなす。2は、正面の下部からの調整で自然面を約1/2剥ぎ、裏面は左側縁部から主に階段状剥離をおこなっている。



第17図 その他の遺物

第2表 中野ノ辻遺跡石棺計測表

番号	土 坑 径			棺 身 径			方 位	副 葬 品	長側板数	短側板数	蓋石数	枕方 位	備 考
	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	長径(m)	短径(m)	深さ(m)							
1	136	東38 西35	東35 西43	127	東29 西20	東42 西35.5	N-131°-E	ガラス製管玉(3点) 碧玉製管玉(6点)	4(北) 3(南)	1(東) 1(西)	10	東	
2	133.5	東35 西48	東32 西28	114	東32 西41	東27 西36	N-131°-E	土副片(3点)	3(北) 3(南)	1(東) 1(西)	36	西	
3	114	東23 西23	東27 西24.5	105	東25 西18	東32 西43	N-117°-E		4(北) 4(南)	1(東) 1(西)	4	東	蓋石は現存の枚数
14	168.5	北32 南48	北38 南37	106	北34 南29	北27 南29	N-14°30'-E		2(東) 4(西)	1(北) 1(南)	5	北	蓋石は現存の枚数
15	82	東31.5 西29	東49 西41.5	64	東24 西31	東41 西31	N-78°25'-E		2(北) 2(南)	1(東) 1(西)	19	西	黒曜石副片あり
16	139	東57 西36	東75 西49.5	114	東47 西25	東13 西38	N-95°-E		3(北) 3(南)	1(東) 1(西)	24	東	蓋石は現存の枚数
17	109	北53 南50	北55 西46	102	北45 南47	北41 南37	N-21°30'-E	管玉状製品(1点)	2(東) 2(西)	1(北) 1(南)	26	南?	
18	95	東58 西49	東43 西41.5	84	東36 西33	東54 西64	N-112°-E	土副片(2点)	2(北) 3(南)	1(東) 1(西)	23	東	
19	132	東31 西47	東44.5 西41	120	東19 西33	東44 西40	N-120°-E	土副片(1点) 刀子(1点)	4(北) 4(南)	3(東) 3(西)	33	西	蓋石は現存の枚数
20	107	東35 西31	東34 西28	94.5	東28 西27	東55 西39	N-80°10'-E		3(北) 4(南)	1(東) 1(西)	10	東	蓋石は現存の枚数
21	120	東23 西38	東49 西36.5	123	東35 西42	東43 西44	N-107°-E		4(北) 5(南)	2(東) 2(西)	18	西	

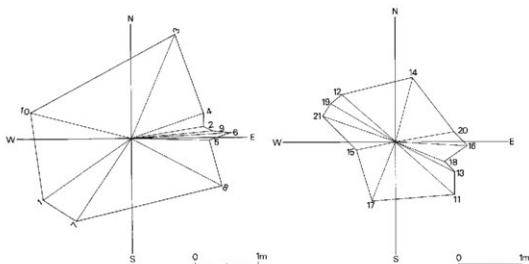
IV まとめ

(1) 石棺について

石棺は、昭和55～56年に渡って実施した10基と平成3年実施した11基とで合わせて21基の石棺を調査検出した。21基の石棺群を平面プランでみた場合、2群に分かれて集中する箇所が認められる。その1つのグループは、北側にある2～8号の7基であり、もう1つは、南側にある13～19号の7基である。

前者をAとし後者をBとして比較すると、土壌の長さではAグループは121～185cm(平均155.8cm)、Bグループでは、82～139cm(平均111.3cm)であった。棺身の長さでは、Aグループが117～180cm(平均147.5cm)に対しBグループは、64～114cm(平均99.3cm)であり南側が小型の石棺であることがいえる。長側壁の板石の枚数では、6～12枚がAグループで4～8枚がBグループ平均差が3枚となっている。

次に11～21号の石棺の構造について点検すると、土壌では、全体的に小口・側板の縦の長さより深めに地山を掘り下げているが、11号が小口石をセットする時点で縦が長すぎたものか東西の短辺に掘り下げた跡が認められる。12号では、土壌内に張りだし部分が北側と南東隅に設けてあり、北側は棺身の外側となり南東隅は、棺身内であった。土壌床面上には、敷石



第18図 中野ノ辻石棺法量と主軸方位(1号～10号) 第19図 中野ノ辻石棺法量と主軸方位(11号～21号)

等の施設は調査した土壌からは検出しなかった。棺身では、長側板に厚みと丸みのある(11・13・17・20号)玄武岩をもちいたものと、扁平で薄手(12・14・15・18・19・21号)の礫をもちいたものがある。両長側壁の板石枚数では15・17号が4枚、12・16号が6枚、13・19号が8枚、もっとも両長側石合計が多いのは21号の9枚となっている。小口石では、2枚以上(19号の両小口で6枚と21号の4枚)をあてるものと同一小口を1枚ずつで構成しているものがある。石組は、両長側壁の端部と小口が一致することを意識したような造りをなしているが、13号石棺の東側小口が、長側壁に挟まれた状況を呈している。蓋石では、石棺材と同様に断面に厚みと丸み(11・17・21号)を持った玄武岩硯を用いるものと扁平な板石(12・14・15・18・19号)を用いるものがある。特殊な形態としては、14号の蓋石のみが一枚(90×70cm)の平たい板石をで棺身上を覆うに置いている。

(2) 石棺の時期について

(第20～24図)

出土遺物が、5基の石棺より出土しているものの、時代を設定できる土器が小片のため判断に苦慮している。ただ、時期を考えるうえで11号石棺よりガラス製管玉の出土があり、時期設定の手掛かりとして果内では、嵯峨島「原の辻遺跡」の第14試掘壕から3基の甕棺を検出した中の第3号甕棺よりガラス製管玉の出土報告がある。

これによると、管玉は「長さ1.98cm、直径が0.44cm、端部で0.35cmの胴太の形をしている。」また、甕棺は破損を受けているものの、上蓋が最大胴径26.0cm、口縁径23.3cm、復元器高30cmで、卵形の胴体に「く」の字に折れる口縁部を持った土器と、下甕に最大胴径34cmで、口縁部から肩部を欠いた合口甕棺で、弥生時代後期前半に所属すると報告がある。この他甕棺からは、勾玉・小玉類も出土している。

以上のことから、11号石棺については、上限が弥生後期の可能性が考えられる。また、18号より土器片2点が出土しているが、これについても弥生後期の遺物と判断される。

石棺については、「ハロウ遺跡」で、弥生後期初頭～前半代には4枚以上を数えることが多く、後期後半～終末頃になると次第に棺材が減少する傾向にあるといわれている。また、敷石については、時期が降るにしたがって設けなくなる傾向にあるとも言われる。

次に、果内で群集する石棺墓について概観し、石棺の時期と形態の変



宮ノ本
1号



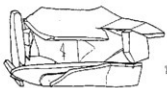
宮ノ本
3号



宮ノ本
5号



宮ノ本
6号



宮ノ本
7号



宮ノ本
8号



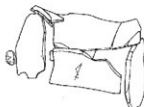
宮ノ本
9号



宮ノ本
10号



宮ノ本
11号



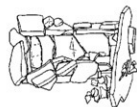
宮ノ本
12号



宮ノ本
13号



宮ノ本
14号



宮ノ本
15号



宮ノ本
18号

第20圖 宮ノ本遺跡石棺圖① (1/40)

原社4より転載



中道壇
1号



中道壇
7号



中道壇
2号



中道壇
9号



中道壇
3号



中道壇
10号



中道壇
4号



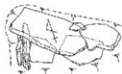
中道壇
11号



中道壇
5号



中道壇
12号



中道壇
6号



白井川 1号



白井川 2号



白井川 3号



白井川 4号



白井川 5号



白井川 6号



白井川 9号



白井川 10号



白井川 11号



白井川 12号



白井川 14号



白井川 19号



白井川 20号



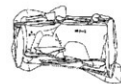
中野ノ辻 21号



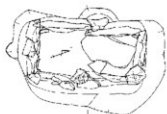
中野ノ辻 20号



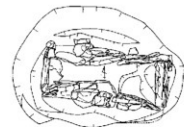
中野ノ辻 15号



中野ノ辻 18号



中野ノ辻 17号



中野ノ辻 16号



中野ノ辻 15号



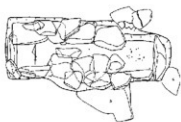
中野ノ辻 14号

第22図 白井川・中野ノ辻遺跡石棺図③ (1/40)

※註6・7と木書より転載



中野ノ辻
13号



中野ノ辻
6号



中野ノ辻
12号



中野ノ辻
5号



中野ノ辻
11号



中野ノ辻
4号



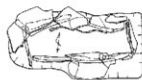
中野ノ辻
10号



中野ノ辻
3号



中野ノ辻
9号



中野ノ辻
2号



中野ノ辻
8号



中野ノ辻
1号



中野ノ辻
7号

第23図 中野ノ辻遺跡石棺図④ (1/40)

※本図と註1より転載

化から中野ノ辻遺跡を考えていきたい。

弥生時代前期から中期にかけての石棺では、前期末（板付けIIb）と中期初頭（城の越）を中心に中期前半期に比定されている「宮の本遺跡」がある。遺跡では、17基の石棺の検出があり、北側調査区の1・3・5号が前期末で、被葬者は伸展葬で埋葬されている。これに対し、南側調査区の6～18号は、中期前半があり100cm前後に短くなり、側板を重ね、屍床面に床石を敷いた石棺が多くなり、全てが屈葬した形態をなしている。

この後者の敷石構造に比較的類似する遺跡に「中道塚遺跡」がある。床面に敷石を持った2・3・4・6・9・10・11・12号がある。副葬品に4号石棺内より磨製石剣が出土している。

中期から後期にかけての石棺では、「白井川遺跡」がある。この遺跡では16基の石棺を確認し、4基の石蓋土壇墓・1基の壟槽墓を検出している。石棺の構造は、小口石が長側壁に挟まれたものが2・4・5・6・14・19・20号とあり、小口石が長側壁の外側にあるものが10号にある。

以上の石棺について構造的な面の共通点をまとめると前期が小口と長側壁端部を揃えた井桁状に石材を組む傾向にあり、中期前半以降になると埋葬形態の変化から石棺が小型し、小口石幅が広くなり、しだいに長側壁外側へ出すようになる。その後、小口石が長側壁の内側に設置されるようになる。後期頃になると次第に石棺が長くなりはじめ、小口と長側壁端とが揃うか、やや外側へ出す傾向がある。これらのことから、白井川遺跡の石棺から後続する石棺に中野ノ辻遺跡の11～21号石棺が位置づけられると考えられる。

註1 高野晋司編『中野ノ辻遺跡・里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第1集田平町教育委員会1982

註2 藤田和裕編『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第31集長崎県教育委員会1977

註3 高倉洋彰編『対馬豊玉町ハロウ遺跡』長崎県下県郡豊玉町大字(位)所在簡式石棺墓群の調査報告—豊玉町教育委員会1980

註4 久村貞男編『宮の本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書佐世保市教育委員会1980

註5 藤田和裕編『中道塚遺跡』長崎県文化財調査報告書第90集長崎県教育委員会1988

註6 安楽勉編『白井川遺跡』—板杵中央区園場整備事業にかかる調査—

東彼杵町文化財調査報告書第3集長崎県東彼杵町教育委員会1989
註7 安楽船編『白井川遺跡(II)』東彼杵町文化財調査報告書第4集長崎県
東彼杵町教育委員会

参考文献

塚原博編『神崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第4集長崎県北松浦郡
小値賀町教育委員会1984
高倉洋彰著『弥生時代社会の研究』株式会社東出版事業社1981

圖 版



遺構配置 (北側より撮影)

图版 2

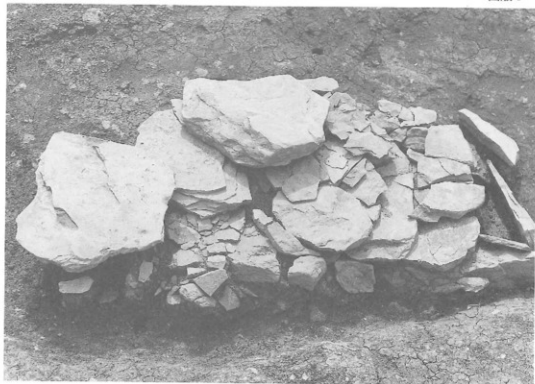


蓋石



棺身

11号石棺



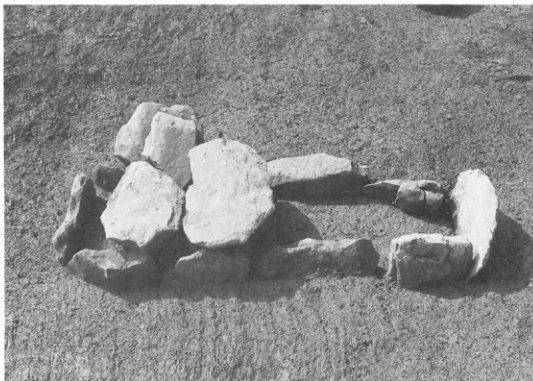
盖石



棺身

12号石棺

図版 4

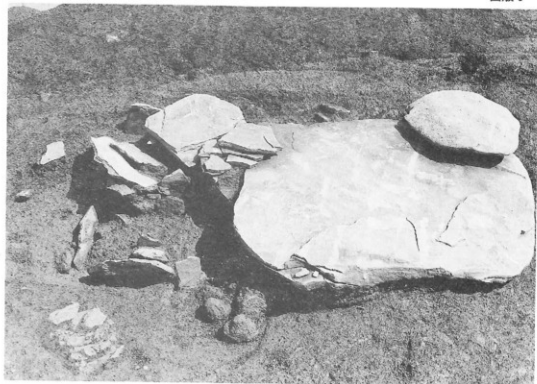


墓石の現状



棺身

13号石棺



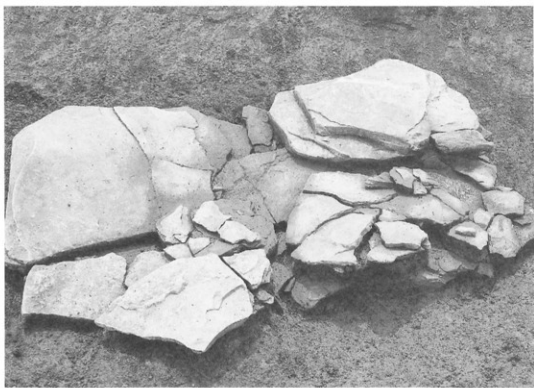
盖石



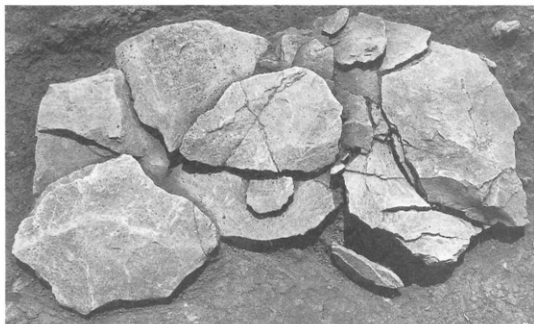
棺身

14号石棺

圖版 6



蓋石



棺身除去

15号石槨



15号石棺・棺身



11号石棺ガラス管玉

19号石棺刀子

15号石棺・出土遺物

图版 8

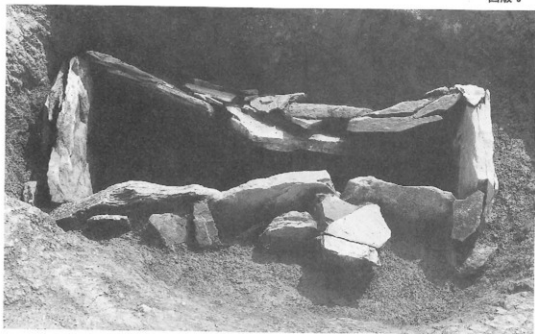


蓋石



蓋石除去

16号石棺



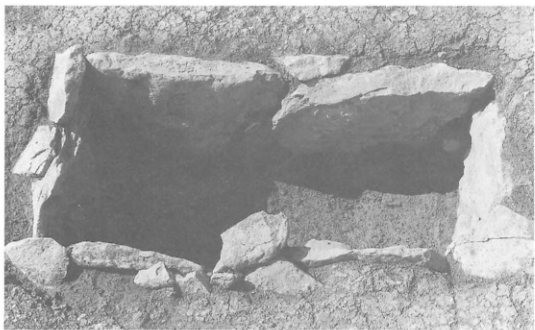
16号石棺・棺身



16号石棺・調査風景

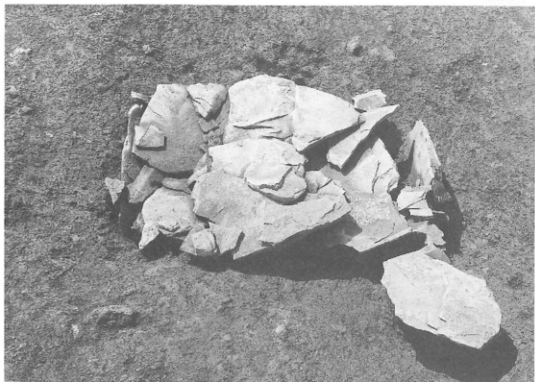


蓋石



棺身

17号石棺

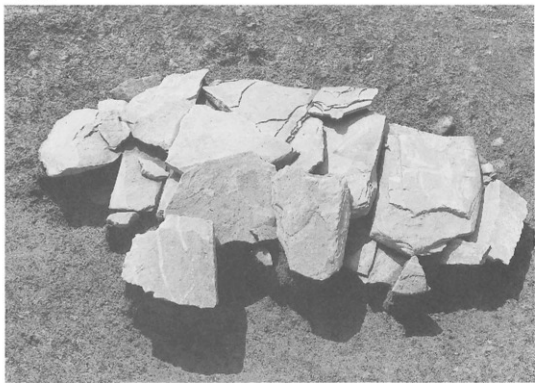


盖石

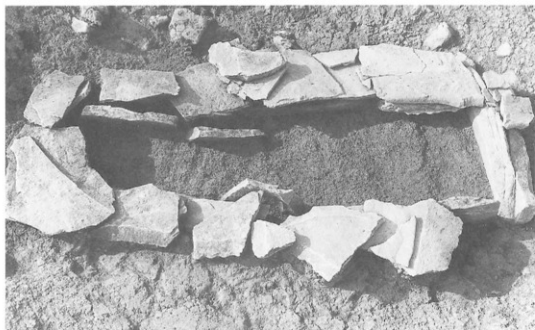


棺身

18号石棺

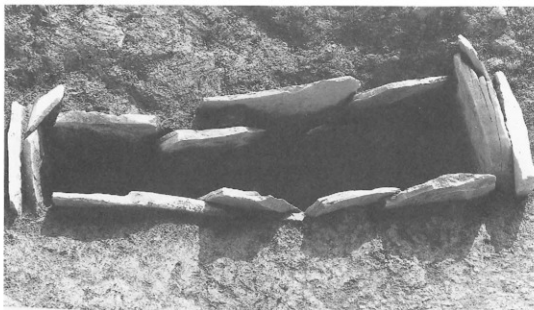


盖石



盖石除去

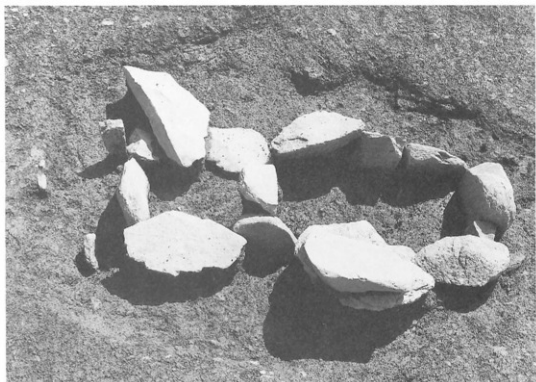
19号石棺



19号石棺・棺身



19号石棺・実測風景



蓋石の現状



棺身

20号石棺



墓石

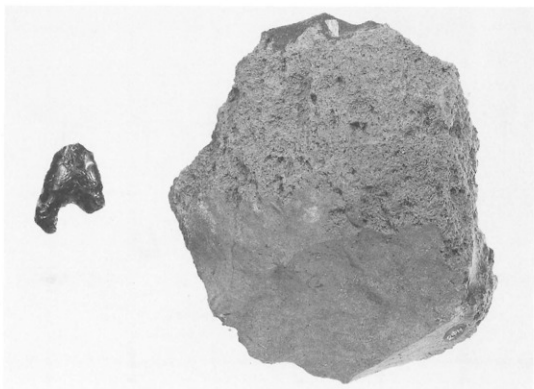
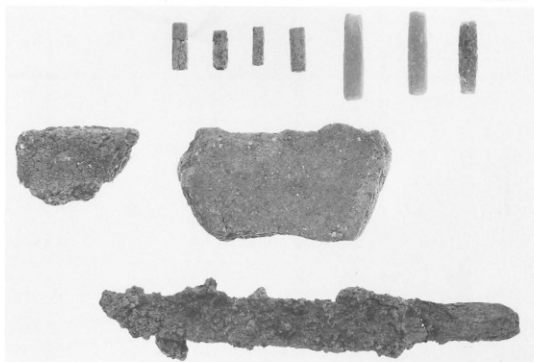


墓身

21号石棺



土壇 (南側より撮影)



石棺内出土遺物・その他

田平町文化財調査報告書第6集

中野ノ辻遺跡

平成4年(1992)3月31日発行

発行所 田平町教育委員会
長崎県北松浦郡田平町山内免270-1
〒851-48 ☎0950-57-0207

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007
〒854 ☎0957-22-6000
